

地場産業生成・発展の契機 －岐阜アパレル産地の事例－

荻久保 嘉章

〈抄 録〉

岐阜アパレル産地は、場・人・時の三条件が偶然重なり生成した。その後、産地では情報収集・分析や戦略構築をめざした活動に協同して取り組み、多彩な人材を輩出し、産地の成長発展を実現した。そこで醸成された志は、環境条件の変化により業績が低迷する現在においても継承されており、そこには新たな産地づくりに向けた意思のみならず、新たな産業創造の可能性もうかがえる。

はじめに

岐阜アパレル産地は、敗戦後、東海道本線岐阜駅前に建設されたヤミ市「ハルピン街」出店者の古着商への転換を契機に、その事業の成果・可能性に着目した人々や関連産業が集積¹⁾し、東京・大阪に次ぐ産地へと発展した。

岐阜県のアパレルメーカーの大多数は岐阜駅前「岐阜繊維問屋町」に集積し、その周辺地域には縫製業をはじめ関連工程を担当する多数の事業者が立地した。最盛期には約1,800店とも称された集積であるが、海外生産の活発化やファスト・ファッションの増加、市場規模の縮小等の環境変化²⁾に対し集積を生かした適合が難しくなったこともあり、現在、往事の面影はない。

伝統性・歴史性が強調されることの多い地場産業産地において、生成の時期が比較的新しい岐阜アパレル産地は、産地生成に関わった当事者に対する聞き取り調査が可能な貴重な産地であった。本稿では、その原点となった「ハルピン街」の建設とその運営母体で活動し、その後の産地発展にも関わった川村一正氏へのインタ

ビュー結果を中心に当産地に関わる研究成果に依拠しつつ、岐阜アパレル産地の生成・発展の契機について考察した。

1 岐阜アパレル産地の生成と発展

(1) 生成期(1946－1950年)

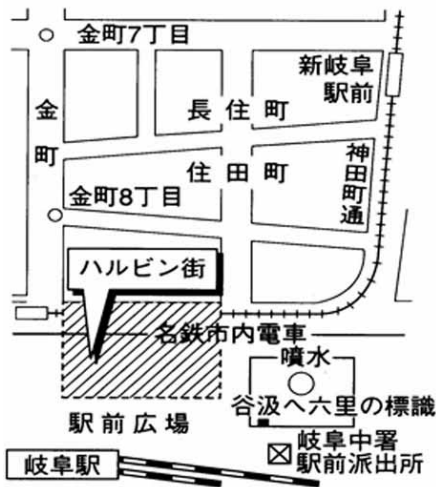
①「ハルピン街」の建設と住宅建設事業

1946年12月、一面焼け野原の岐阜駅前に、引揚者の自立をめざす『岐阜県引揚民更生社』によって、ヤミ市「ハルピン街」が建設された(図1)。

この活動を強力に牽引したリーダーの高井勇と行動を共にした川村氏は、「高井氏は引揚者たちの更生を第一として考え、そのための手段は何でも良かった。『引揚げてきたときに裸の者が、何とかして1日も早く立ち上がることを願っていた』ということだった(拙著, 2003, p.41)」と、高井勇と同社の活動目的について明らかにし、その活動の一環として「ハルピン街」建設に至る経緯等について、次のように語っている。

荻久保 嘉章 (おぎくぼ よしあき), 朝日大学経営学部教授

図1「ハルピン街」建設地



資料：『ぎふ戦後史 問屋街発展の構図』『中部読売新聞』
1980年1月16日朝刊。
出所：拙著，2003，p.233。

『岐阜県引揚民更生社』の活動の第一として、資金集めにかかった。高井氏の末広町の住居に事務所を開き、引揚者が引揚港で国から支給された1人当たり1,000円を出資金とし拠出することによって、更生社の社員ということになった。そのほかには、何も徴収することなく、お互いに自分たちで何をするかを考え仕事の準備をした。

第二に、生活を営む場所を持つということ。とにかく「形をつくらなければならない。仕事するには、やはり拠点が必要」ということで、岐阜駅前に土地が空いており、そこにバラックを造ることになった。(中略)

「(岐阜) 駅前の将来は広場になるところではあるが、現在はまだそういう段階ではないので、商売のできるような土地を提供する」という話になり、生活の目鼻がつくまでの暫定措置として、岐阜県黙認のもとに利用させてもらうことになった。(中略)

建設地が岐阜駅前広場に決まったときに、

高井氏が金華山のすぐ下の末広町にいたため、彼のところにいた若い者が夜になると金華山に出て行って松の木を伐採し、建設の準備を整えた。(中略)

建物は、本当の「掘っ立て小屋」だった。「雨露を凌ぐ」という言葉があるが、ハルピン街では、それが凌げない。柱を立てて、それに材木屋で製材屑(木っ端)をもらってきて屋根伏せとし、間仕切りは引割材の上にお互いに新聞を貼って壁にしたが、何にもないのと同じで隣の声は丸聞こえだった。(中略)

ハルピン街は、14軒で「カギの手」に小屋を作ったところから出発した。駅前ハルピン街の建設は、自然発生的な結果でもある。はじめは、そんなに大きいものはつくる予定はなかった。ところが、その後、どんどん引揚者の申し込みがあり、次々に伸ばしていき、結果的に、百数十軒の駅前ハルピン街ができあがった(拙著, 2003, pp.19-21)。

高井勇が次に着手したのは、対象を引揚者に限定せず一般国民とした「大ハルピン街住宅建設事業³⁾」である。川村氏は、その構想について「我々は『何とかして家を建てる方法はないか』とあれこれ考え、(中略)家のない者が集まって住宅組合をつくることを考え、昭和23(1948)年1月に組合結成に動きはじめた。(中略)そこでの商売は何でもいい、とにかく住宅が大事だということで『大ハルピン街住宅組合』という名前で計画が進んだ(拙著, 2003, pp.30-31)。大ハルピン街の住宅建設は昭和24(1949)年秋にはほとんど完成し、ここに住民約300人の新しい町が誕生した(拙著, 2003,

p.37)」と述べるとともに「住宅建設（大ハルピン街）を計画したのは、実は駅前を立ち退く場合の行き先の確保のためであり、その建設ができる余地を残しておくため、中央に南北の広場をとっておいた。住宅建設は、移転のための布石でもあった（拙著、2003、p.37）」と、住宅建設事業は、当座の事業である「ハルピン街」の次なる局面を考慮した事業であったとしている。

②古着商の鑑札取得と衣料統制の弾力的運用

「ハルピン街」が「ヤミ市」から脱却し、岐阜が繊維の街となる契機となった「出店者の古着商への転換」について、川村氏は「生きるための当面の策」であったと、次のように語っている。

昭和 22（1947）年の夏ごろであったか、高井氏や北川氏などとその店で「食糧統制がだんだん厳しくなるし、いつまでも現在のような商売を続けておれないので、他に何か代わるものはないか」と相談していた。その結果、14 軒の中で繊維を商っていた青井氏が一番調子がいいようなので、繊維に転換してはどうかということになった。

当時は繊維自体もやはり統制品であった。そのため、どうやったら繊維をやれるだろうかという話になり、結局、「古着屋の鑑札を取らなくちゃいけない」ということがわかった。古着屋の鑑札をまとめて取得する方法を検討した結果、岐阜市警察の奥村署長を招き指導を受けようということになり、一夜某所で高井氏ら数人と懇親会を開いた。

（中略）その後、希望者を募ったところ 60 数名が応じ、鑑札が一度に交付され多数の古着商が誕生した（拙著、2003、p.26）。

「ハルピン街」出店者が古着商となった後の事業展開について、川村氏は次のように続けている。

古着商は、仕入・販売のすべてを台帳に記載しておかなければならなかった。それはともかく、今度は材料をどこから集めるかが問題となり、各地の軍需衣料の穴場探しにかかり、宇品、呉、広島、舞鶴などから軍需衣料を集めてきた。それを店に並べるとともに、当時、最も早く現金化できる方法、繊維の流通手段であった東京や大阪のセリ市に持っていった。こうした商品は、関東、東北から来た客に買い占められたため、たちまち払底し、それだけではとても足りなくなってきた。あちこちからも岐阜に買い出しに来るし、こちらからも売り込みに行くというようなことで、岐阜は古着の一大集散地として名をうった。

こうしてセリ市で商品を売り岐阜に帰ってくると、今度は次に行くときに売の商品がない。「さあ、何か作らなくちゃいけない」ということで、今度は一宮・尾西地区の織物業者から原反を仕入れて、商品の製造を始めた。こうして製造した商品は古着として扱えるが、原反は統制品のため警察の取り締まりが厳しく、岐阜に持ち込むのが難しかった。そこで、原反を一反づつ買い、体にまきつけて木曽川の鉄橋を渡り、あるいは笠松附近で夜陰に乗じて舟で木曽川を渡り県内に持ち込んだ。岐阜県に渡ってしまえば、こちらで自由にやれた（拙著、2003、p.27）。

（中略）こうして産地としての岐阜の知名度が全国的に高まり、23 年の暮れあたり

から、今度は向こうから岐阜に来るようになった。しかし、その当時、ハルピン街の住民は、自分たちで岐阜をアパレル産業の集積地にしようとは考えず、夢中で働いた(拙著, 2003, p.29)。

このような非合法の商法は、川村氏が語るとおり、警察当局の取り締まりの対象となる。警察当局より協力を要請された岐阜県は、後に「武藤知事の大英断⁴⁾」と伝えられる取り扱いを断行した。当時の岐阜県商工課長の近藤貢は、ハルピン街出店者の動向と岐阜県の対応等について以下のように記している。

こうしてハルピン街が出来たが、ここに住む人々はかつて外地にいて困苦努力した筋金入りの人々であり、次第に底力を発揮するようになってきた。

そのうち洋服類や洋反物を統制品と知りつつ堂々と店へ並べて売るようになった。

それにミシンなどを買って反物からさらに加工して既製服をつくり、これを北海道や九州へふろしきに包んで運び、現金売りを始めた。

これを知った沼田県警察部長は、経済保安課に命じて取り締まらせることとし、私に協力方を申し入れてきた。

このとき私は商工行政の立ち場から将来産業を育成し、日本を復興させねばならぬと思う。統制品をやみで流すことはたしかに悪いが、相手は引揚者であり、生きるためにあらゆることを考えて商売をやっており、研究心も旺盛だから発展性がある。とくに既製服というのはアメリカ式でおもしろい仕事であるから黙認してほしい。どう

か復興途上にある今日、わが商工行政の行く方に協力願いたいと懇請した。

このため、警察当局もこれを黙認してくれたので、知らず知らずのうちに図々しく取り引きが行なわれるようになり、やがては岐阜の既製服として全国に知れわたり、ぞくぞく地方から買いつけにくるという目ざましい発展ぶりをみせた。

やがて統制は撤廃されたので多くの業者はこれに目をつけ、盛んにミシン加工が始められたのであった。

そこで田中実司氏をはじめ多くの業者が相談して、当時23平方メートルほどの店舗割り長屋を現在の位置に急造し、岐阜問屋町と名づけ、隆々今日に至ったのであるが、やがて西の問屋町もでき、各種の既成服類がここから生み出され岐阜名物となったのである。

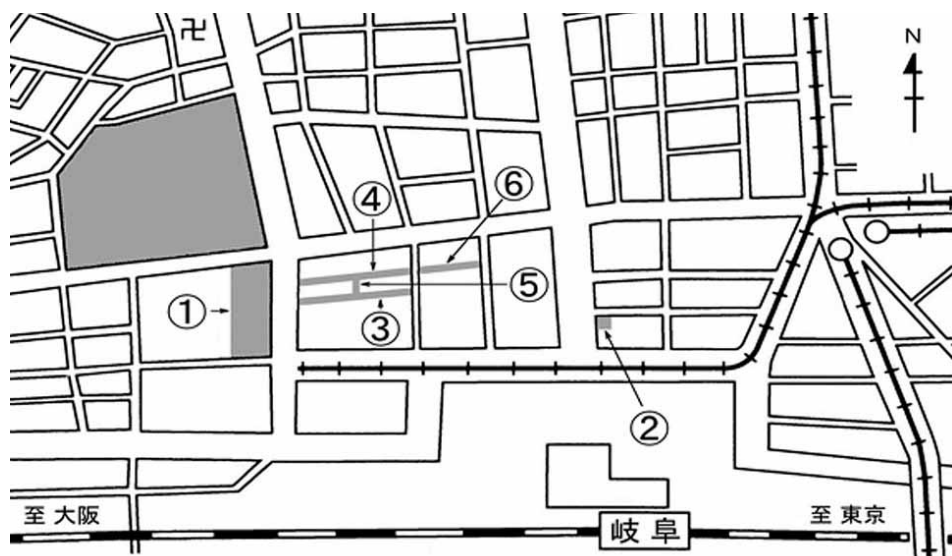
思うに行政の妙味はこの辺にあり、一般の人々は知らないけれどもちょっとした考えから取り締まりを緩和し、人の努力とくふうを生かしたことによって今日の問屋町ができたことは労せずして偉大なる発展の端緒となり、人々が幸福になったというまことにおもしろいケースである(近藤, 1973, pp.274-275)。

③縫製事業の拡大

「ハルピン街」での衣料品の販売拡大に伴い、縫製事業の拡大も求められるようになる。川村氏は、衣料品の販売と縫製が一体的に発展する経緯を次のように語っている。

このような商品づくりをするためには、当然、縫製が必要である。そのため、ハル

図2 大ハルピン街・更生住宅と主な問屋街（1951年）



注：大ハルピン街・更生住宅（岐阜駅北西のアミ掛け部分二箇所が該当）

主な問屋街 ①西問屋町, ②マルフジ繊維街, ③中央通り, ④一条通り, ⑤現金問屋街, ⑥1丁目

資料：『最新岐阜市街地図』篠田書店、1950年より作成。

ピン街の引揚民更生社事務所の1階で縫製工場みたいなことをやった。（中略）縫製工場といっても、ミシンが4, 5台あるだけで、女の子にミシンを踏ませていた。しかし、こんなことでは生産量が足りないため、みんな知り合いのミシンを持っているところへ内職として加工を頼んでいた。

これが、後に岐阜市周辺が一大加工場となり、繊維業界の発展をバックアップする要因となった（拙著、2003, p.28）。

また、三次義之は「現在の岐阜問屋町が、古着や軍服の売買から一步すすんで新たに衣料品をつくって売る形態をとりはじめた昭和22, 3年前後から、問屋町業者の商が、縫製業者の工を必要とするようになり、それ以来、両者は商と工の関係で互いを必要とし、求め合う間柄で今日に至った（三次、1971, p.53）」と、両者の

関係は事業発展による必然の結果であると記している。

（2）発展期（1950年以降）

①商業集積の形成

1950年7月、岐阜駅前を占拠していたヤミ市「ハルピン街」は解体され、出店者は岐阜駅から約300メートル離れた日ノ本町（大ハルピン街の隣地）および西問屋町に建設された更生住宅（引揚者無縁故住宅）へ移転した。しかし、各地からの仕入業者は岐阜駅を利用していたこともあり、旧「ハルピン街」出店者は移転により低下した立地条件の改善を求め、これに応えるべく岐阜駅前にマルフジ繊維街が建設（1950年11月）され、「立地条件のよさが物をいい千客万来、大いに繁昌（三次、1971, p.17）」した。その後、岐阜駅前周辺には中央通り、一条通り、現金問屋街等の問屋街が建設された（図2）。

岐阜駅前周辺に問屋街が形成されていく様子を、川村氏は次のように語っている。

駅前周辺に戻る動きとマルフジの建設を契機として、繊維屋のための貸店舗作りが始まった。すなわち、長住町から真砂町にかけては材木屋が多く、貯木場のように丸太が置いてあったが、「材木も売れることは売れるが、それよりも家を建てようじゃないか」ということで、材木屋が貸店舗を建て始め⁵⁾、また、その附近の住宅で道路に面した部分を貸店舗用に改築し、マルフジ繊維街である程度経験したり商売をやっていた者が移転し店を持ち始め、駅前一体はたちまち繊維街になっていった。

もちろん、駅前ハルピン街で育ったものが「基」であり、マルフジ繊維街から出ていった者が問屋町で中心になっていった。ここからさらに問屋町の方へという動きの中から岐阜の繊維街は形づくられていった。

繊維の商売を貸店舗の集積で伸びたのは、全国的にも岐阜が初めてではないかと思う(拙著、2003、p.39)。

こうして建設された中央通り・一条通り・現金問屋街および西問屋町は、1951年12月に「岐阜繊維問屋町連合会(1987年『社団法人岐阜ファッション産業連合会』に改組)」を結成し、さらに1953年3月には、同連合会とマルフジ繊維街、新ハルピン、山三市場、長住町発展会等の岐阜駅前一帯に立地する繊維業者を加えた「大同団結」が決定し(東海繊維経済新聞社、1975、pp.40-41)、岐阜駅前周辺は「個の商い」から「集積による事業」の場となった。

②研究グループの結成と展示会の開催

その後、関係者が情報収集・分析や戦略構築等をめざし協同して取り組んださまざまな活動は「プラットフォーム」として機能し、産地を牽引する多彩な人材を輩出した。

たとえば、1955年6月に結成された『KO服装研究会岐阜県支部(1958年『岐阜紳士服技術研究会』に名称変更)』は、縫製技術の向上をめざした技術講習会のみならず、技術職員による巡回指導を行い、岐阜紳士服の縫製技術を全国的水準に引き上げる原動力となった(三次、1971、pp.27-28・東海繊維経済新聞社、1975、p.74)。

また、1961年5月に発足した『岐阜フロンティア』は、会員の資格を「岐阜市に在住する繊維産業の経営者、または経営管理者として品格ある青年」と規定し、教育訓練、討論会、研究会、講習会の開催、企業の視察研究等の活動を行った(東海繊維経済新聞社、1975、p.197)。発足時には13人であった会員数は、その後138人に増大し、その活動は1999年まで継続した(久代、2004、p.10)。

さらに1964年5月に発足した『岐阜繊維製品協会(1982年『岐阜アパレル協会』に名称変更)』は、産地の振興と企業経営の近代的発展、経営合理化、生産技術、新商品、情報収集、研究会の開催、資料情報の配布等を目的として活動し、産地の「アイデアセンター」として機能した(東海繊維経済新聞社、1975、pp.277-278)。産地における人材の必要性を認識した当協会は、県下の公立高校・短大にファッション人材育成のための新学科創設を陳情し続け、県立大垣女子高等学校(現県立大垣桜高等学校)、県立岐阜三田高等学校(現県立岐阜城北高等学校)、岐阜女子短期大学(現岐阜市立女子短期大学)に、

ファッション・デザイン系の学科が新設された(久代, 2004, p.37, pp.42-43)。

一方, 1961 年 8 月には全国初の既製服展示会『岐阜モード』を開催し, その後, 同展示会は『岐阜ファッションフェスタ』『岐阜ファッションフェア』と名称変更し, 2010 年 10 月まで 50 回開催された。

2 岐阜アパレル産地生成の契機「場」「人」「時」

東海道本線岐阜駅前に位置する「ハルピン街」は, 各地からの交通利便性が高く, 周辺には知多・三州(綿織物), 尾州(毛織物), 岐阜(絹織物)等の産地のみならず, 商品の調達先となる「繊維市場(セリ市)」が豊富に存在した。さらに, 周辺地域には戦前から縫製を手掛ける企業も数多くあり, また, ちょうちん・和傘などの家庭内職の一般化等, アパレル産業の萌芽に資する多くの素地が存在した。そして, これらは岐阜産地生成の要因として指摘されている⁶⁾。

はたして, 岐阜アパレル産地はこれらにより生成したであろうか。そこには, 所期の目的は異にするヤミ市「ハルピン街」を強力な牽引力により建設した高井勇の一連の活動が触媒的に機能⁷⁾した結果, 時代状況を背景とした県当局の取り扱いもあり, 高井勇と共に行動し事業化の手応えを感じ取った人々が多数出現し, さらに当地における事業発展を確信した人々の活動が, 産地生成の契機として大きく作用したと考える。

久代譲は『岐阜アパレル創出の怪物』として, 高井勇を次のように評している。

本来岐阜には洋服生産の歴史はありません。無から有を生み出すには, 天の時, 地の利, 人の和, 指導者が必要とよく言われ

ます。岐阜にはそれがあったようです。(中略)

無から有を生んだ岐阜のエネルギーのリーダーとして「高井勇」さんを抜きにしては語れません。激動期, 荒天突破の船長は, 半身神, 半身悪魔でなければならないといわれますが, そんな怪物的とさえ見られていた高井さんが, 岐阜アパレルの餅を搗かれたように思います。(中略)

高井さんは「我々は国策, 命令で海外に出てひどい目にあい, 乞食ようになった。国は我々を人並の生活にする責任がある」という論理でした。空家を住家のない人に貸させたり, 古着商の鑑札をとり新品を扱う事を黙認させたり, きびしい統制の取締りを法も人のつくったもの, 生きるためにゆるやかにと接渉される。つまり無から有を創り出すには, このような俠気, 人道正義, 時には狂気が必要のようです(久代, 2004, pp.5-6)。

また, 川村氏は「高井氏という男は, 酒もそう飲まず, 女遊びをするわけでもなく, 本当に変わった人間だった。彼は, ハルビンにいたところから親分肌というか, リーダーシップを発揮していた。ともかく, 先を見ることが早かった。先を見て, こうだと思ったら突き進んで行った(拙著, 2003, p.41)」と高井勇を評するとともに, 岐阜を東京・大阪に続くアパレル産地へと発展させる契機をつくり, 岐阜駅前周辺地域に「貸店舗」という事業機会のヒントを与え, さらに繁華街「柳ヶ瀬」を興隆させたばかりか「大ハルピン街」という住宅問題解決策を手掛けたと, その先見性を具体的に指摘している(拙著, 2003, p.43)。

こうして「ハルピン街」は孵卵器（インキュベーション）として機能し、古着商に事業機会を認めた出店者は、所期の目的でもあった更生住宅に移転後も、事業の継続維持のみならず、さらなる発展を図るために岐阜駅前マルフジ繊維街等の集積に回帰した。さらに、戦前より岐阜駅前周辺に出店していた材木商らによる土地売却や貸店舗建設の中、当地での取引から事業の発展を確信した者による積極的な投資や当地での事業経験を通じて起業した者もあり、さまざまな出自の人々⁸⁾が当地に蟄集し、岐阜に新たな産業を創造（イノベーション）した。

「ハルピン街」が建設された敗戦直後という「時」は、特殊だったかもしれない。しかし、山崎充が「地場産業は、歴史の発展過程で積極的にイノベーションを展開することによってその永続を確保してきた（山崎，1981，p.135）」とした上で、「これら（戦後の特殊事情⁹⁾）は、イノベーションを喚起し、成功させることも容易とする条件であった（山崎，1981，p.201）」と指摘するように、岐阜アパレル産地の生成も、特殊な状況が常態であった「時」を活かした結果かもしれない。

宮原諄二は「イノベーションとはすこぶる社会的な現象であって、アイデアをつくり出す「人」の要因、環境や社会という「場」の要因、時代や偶然などの「時」の要因の三つの条件がすべて整って共鳴しあわないと成立しない（宮原，2016，p.40）」とイノベーション成立のための三条件合一の重要性を強調している。

久代譲が指摘するとおり、敗戦直後という「時」に、岐阜という「場」において、高井勇が強力なリーダーシップを発揮する中、高井勇と共に「糊口を凌ぐ」ところから始めたさまざまな活動の結果（セレンディピティ）としてアパ

レル産地が形成された。そこに蓄積された「意欲」は産地生成時のみならず、その後の成長発展においても機能し、産地を構成する人々は事業の発展・知識習得をめざした研究活動に協同して取り組み、自らの問題解決のみならず、産地のビジョンを策定し続けた。こうした過程を通じて多彩な人材が輩出され、独立起業する者が増加し、二代目経営者ともども産地発展の牽引力となった。

このところの産地および企業業績低迷の要因として、アパレル産業を取り巻く構造変化が指摘される。こうした中、1991年から岐阜産地の情報発信イベントとして『ア・ミューズ岐阜』が開催され、2017年3月には第26回目を迎えた。この間、産業界の活動はもとより、かつて陳情の結果ファッション・デザイン系学科が新設された教育機関のひとつである岐阜市立女子短期大学を中心に、周辺の大学・高校・専門学校が参画する産学連携の取り組み¹⁰⁾も繰り返し実施されている。

こうした活動は、構造化した問題に対し、短期的に成果が得られるものではないかもしれない。しかし、産地に対する問題意識と情熱を持つ人々が集まり、多様な考え・価値を認識し、新たな価値を創出する人材の芽の発見・育成をめざす取り組みには、産地に継承された産地づくりに向けた意思のみならず、新たな産業の創造¹¹⁾として結実する可能性もうかがえる。

注

- 1) 岐阜既製服産業連合会は「岐阜繊維問屋町」を構成する業者の出自について、①国鉄岐阜駅前に集結したハルビン街の人たち（引揚者・復員者）、②繊維の統制解除によって動き出した地元繊維業界の人たち、③大阪方面で繊維一筋に修業した人たち、④戦後繊維業に転職した県内外の人たち、⑤岐阜問屋町との取引が縁で移住した県外の人たちに区分している（東海繊維経済新聞社、1975、p.48）。
- 2) 徳田（2017）は「岐阜アパレルメーカーを取り巻く環境」として、①グローバル展開するファストファッションによる低価格化、②販売形態の変化による小売業界の強化、③主要販売先（量販店・専門店）のプライベート・ブランドの拡大、④ファッションのリアル・クローズ化、⑤海外生産拠点のシフト（中国＋東南アジア・南アジアへ）、⑥国内市場の縮小、海外市場では苦戦の6点を指摘している。
- 3) 住宅建設事業における高井勇と関係者の活動については、根岸（2016）が詳細に論考している。
- 4) 「武藤知事の大英断」について、『中部読売新聞』は次のように記している。

当時の製品価格は、統制法によって決められていた。ところが、衣料統制法第2条第6項で「知事が認可したものに限り、その県において売りさばかれる」ことになっていた。そこで、県は繊維製品査定委員会を設け、そこで査定した衣料を知事が認可した製品に適用、県外にも持ち運んで衣料を次々に売るようになった。

これが後になって、当時の知事、武藤知事の大英断として伝えられるようになった。しかし、実際には、ほとんどの実権を任されていた近藤ら商工課の知恵だった、というのが真相のようだ（『ぎふ戦後史 問屋街発展の構図』『中部読売新聞』1980年2月2日朝刊）。

- 5) 岐阜駅前に立地していた自らの材木店を貸店舗にした川出孝一氏は、岐阜駅周辺の材木店が繊維街になる経緯について、次のように語っている。

昭和25、6年頃になると、だんだん繊維が伸びてきて、ひところのヤミ市というものが新しくキチンとした形になってきたので、国六木材さん達が今の問屋町一条通り、二条通りにあった川崎航空機倉庫一帯の跡地を坪25,000円くらいで分譲されたと聞いています。

そうなると広い土地を持っている他の材木屋さんも、製材工場跡地や木材置場に繊維街を建てて家賃を取った方が良いということになり、次から次へと新しい繊維街が新設されるようになりました。

これがきっかけで、他の商売の方々も繊維街に模様替えして、いままでのご商売は自動車の便の良い広い場所へ移られました。特に岐阜車輛の跡地がマルフジ繊維街にされてから、新岐阜駅に便利な住田町一帯に店が増えました。

こうして、吉野町・長住町・真砂町・金町の一面に一大繊維街が成立することになりました。

周囲が全部繊維街になってしまい、私の店も42年に丸川繊維街という貸店舗にして、宇佐南2丁目に移転しました

(拙著, 2003, pp.182-183)。

- 6) たとえば, 岐阜県・岐阜市・岐阜市中小企業経営問題研究会 (1970, p.1), 野田 (2004), 久保村 (2005, p.12) 等。
- 7) 「ハルピン街」出店者で後に東海繊維経済新聞社社長となる越中谷利一は, 高井勇について次のように記している。

一番先きに思い出すのは, 高井勇さんのことだろうか。もっとも, 高井さんは現在の姿の間屋町とは直接関係はない。しかし間接的には大いに関係がある。(中略) 高井さんは人も知る間屋町のいしずえを築いた大功労者ではあるが, 一面当時としては最大の障害であった。全国でも有名だった国鉄岐阜駅前のブラックマーケット (ハルピン街) はがんばること 5 年の後, 現在の西間屋町, 呉服通り一帯に移転した。たしかに 149 戸だったと憶えている。そこまでは高井勇さんのいってみれば支配下であった。その高井さんには大きな抱負があったが商業地区としての地固めよりも, 外延的, 政治的な野心といった傾向が著しかった (三次, 1971, p.14)。

- 8) 1960 年に東海繊維経済新聞社に入社した後, 1994 年まで岐阜アパレル協会専務理事, 岐阜フロンティア事務局長等として当産地の発展に深く関わった久代譲は, 産地の形成・発展に関わった人々の属性の拡大を,
①昭和 20 年代前期: 引揚者や復員軍人等,
②昭和 20 年代後期: 岐阜で商売ができると参入した人, ③昭和 30~40 年代: ①②からの独立組, ④昭和 50 年代: ①②の二代目組が中心, ⑤昭和 60 年代: ③からの独立組と, 時代別に整理している (久代, 2004, pp.4-

5)。

- 9) 山崎充は, 地場産業におけるイノベーション事例を示す中で, 戦後の特殊事情が強く影響していることは否定できないとし, ①戦後の混乱, ②経済的・社会的環境の激変, ③技術革新, ④日本・欧米間の技術ギャップ, ⑤朝鮮特需による市場の急拡大の 5 点を, 戦後の特殊事情として指摘している (山崎, 1981, pp.199-201)。
- 10) こうした取り組みの詳細・成果等については, 伊藤・平・久保村 (2003), 伊藤・久保村 (2005), 伊藤 (2009), 久保村 (2004), 平川 (2012・2013), 村上・平川 (2012), 村上 (2013) に詳しい。
- 11) 柳行李の産地であった豊岡 (兵庫県) では, 皮バンド付の柳行李にハンドルを付けた「行李鞆」に錠前を付け「トランク型行李鞆」を開発し, あるいは電気絶縁素材を使用した「ファイバー鞆」を開発する等, 既存のモノ・技術の組み合わせによる製品開発を続け, 新たな市場を開拓し産地の中核となる製品を行李から鞆へと発展させた。この結果, 豊岡は杞柳製品から鞆製品の産地へと転換した (拙稿, 2014)。

参考文献

- 伊藤陽子・平真由美・久保村里正 (2003)「岐阜地域に於けるアパレル産業の活性化と大学の地域貢献 - ファッションショー「GIFUを着る」の実施を通して-」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第52輯, pp.185-202
- 伊藤陽子・久保村里正 (2005)「ファッションショー「GIFUを着る Part III 若人がGIFUを斬る」の実施」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第54輯, pp.151-161
- 伊藤陽子 (2009)「「ファッションショー実施」についての考察 - 「GIFUを着る」「Fashion Show of the Future Designers in GIFU」を通して-」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第58輯, pp.115-120
- 萩久保嘉章・根岸秀行編 (2003)『岐阜アパレル産地の形成 - 証言集・孵卵器としてのハルビン街-』成文堂
- 萩久保嘉章 (2014)「地場産業産地の持続的成長 - 豊岡杞柳産業産地の事例-」『立命館経営学』第52巻第4・5号, pp.1-23
- 岐阜県・岐阜市・岐阜市中小企業経営問題研究会 (1970)『岐阜既製服産業の実態』岐阜県
- 久代譲著 (2004)『岐阜アパレル側聞録 - 団体の見た人間群像・昭和私外史-』
- 久保村里正 (2004)「デザインを通じた地域との交流による教育」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第53輯, pp.179-188
- 久保村里正編著・村上眞知子監修 (2005)『ファッションのまち岐阜』岐阜市商工観光部ファッション産業活性化室
- 近藤貢著 (1973)『岐阜県政百年史』
- 東海繊維経済新聞社編 (1975)『岐阜既製服産業発展史』社団法人岐阜既製服産業連合会
- 徳田将康著 (2017)『アパレル・繊維工業 平成28年度』公益財団法人岐阜県産業経済振興センター (<http://www.gpc-gifu.or.jp/chousa/jiba/apparel.pdf>, 2017年6月5日閲覧)
- 西村貢編著 (2005)『繊維問屋集積地の取り組み - 「岐阜アパレルの改革を考える」シンポジウム-』地域経済活性化研究会
- 根岸秀行 (2016)「戦後岐阜の引揚者集団における住宅開発 - ヤミ市から産業集積への一過程-」『富山大学人間発達科学部紀要』第10巻第2号, pp.221-234
- 野田隆弘 (2004)「岐阜アパレル産業の現状と今後の方向」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第53輯, pp.153-159
- 平川すみ子 (2012)「産学協働による産地再生の試み - 第2回岐阜マザーズコレクションの報告-」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第61輯, pp.99-104
- 平川すみ子 (2013)「第3回岐阜マザーズコレクション - 産学協働による産地再創造をめざして-」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第62輯, pp.127-132
- 三次義之編 (1971)『問屋町の歩み - 岐阜産地の人々-』東海繊維経済新聞社
- 宮原諄二著 (2016)『「白い光」を創る - 社会と技術の革新史-』一般財団法人東京大学出版会
- 村上眞知子・今井素恵 (2005)「岐阜アパレル産業の実態調査」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第54輯, pp.141-150
- 村上眞知子・平川すみ子 (2012)「岐阜マザーズコレクションの作品制作とカリキュラムの位置づけ」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第61輯, pp.79-84
- 村上眞知子 (2013)「岐阜マザーズコレクションの作品制作に対する学生の意識」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第62輯, pp.107-112

山崎充著（1981）『地場産業都市構想－地域と
産業の革新を求めて－』日本経済評論社